



弁護士

田中 秀雄

● 転倒

今年4月末の出勤途中、最寄りの地下鉄の駅の近くの10メートルほどの小さな坂の階段を降りる途中の真ん中辺で足を踏み外して転倒し、まるで水泳のダイビングのような形で坂の真下まで頭から突っ込んでしまった。頭を打ち、顔面を打ち、歯も1本折れ、膝まで打った。おでこから血がダラダラと流れていたので近くの病院で手当を受けた。幸いどこも骨折はしていなかったが軽い「むち打ち症」になったため、今も近くの整形外科に通っている。「一寸先は闇」とはこのことである。何十年と通い慣れ、危険と思ったこともない坂道でこんな事故に遭うとは人生は何が起るかわからない。

● 家族はつらいよ

テレビで「家族はつらいよ」という山田洋次監督の映画を見た。橋爪功演ずる定年退職後の夫が、誕生日をまもなく迎えようとしている吉行和子演ずる熟年の妻に「何か欲しいものはないか」と尋ねると、その答えは「離婚届」であったという話である。夫は妻に対し「ありがとう」などと言ったこともない典型的な昭和の男であり、ずっと従順であった妻がそんなことを考えているなど思ってもみなかったので、晴天の霹靂であった。映画はドタバタの末、夫が急病で倒れてしまい、命が助かった夫が妻に本心で離婚を望むなら離婚に応じてやろうと離婚届に署名捺印して渡し、長い間ありがとうと感謝の気持ちを述べたところ、妻も夫の気持ちが分かって離婚届を破り捨てるハッピーエンドで終わった。しかし、現実には夫が、妻の気持ちが分かっておらずある日突然離婚と言われ、別れてしまう夫婦も多い。

● 突然のサヨナラ

長い出張から帰ってきたら、奥さんと子どもが家財道具とともに消えて自宅はもぬけの殻となっていた離婚事件を受けたことがある。仲の良い夫婦と夫は思っていて、夫は妻と一生連れ添おうと思っていた。当然、妻も同じ気持ちで添い遂げてくれるものだとばかり思っており、出張もいつもと変わりなく出掛けて行ったのである。妻にそんな素振りは全くなかった。ところが、出張から帰ると妻子が家財道具と共に消えていた。一寸先は闇である。妻は夫の、上から目線の態度が嫌で、ずっと直してほしいと合図を送っていたのに分かってくれないので離婚を決意したのである。この事件は修復出来ないほど夫婦関係が破綻して



はいないので、妻が離婚訴訟を起こしても夫が勝訴するかもしれない。しかし一度離れた奥さんの心が戻ってくることはない。婚姻費用をもらいつつ数年後に離婚訴訟を起こされれば、今度は夫が負けるであろう。この事件は夫が諦めて離婚で終わった。

● 交通事故

交通事故の事件をやっていると一寸先は闇だと思うことが多い。加害者のちょっとした不注意が被害者やその家族に永遠に取り戻せない致命的な損害を与えてしまう。弁護士としては被害者や家族らの怒り、思いや日々の苦しみを掬い取って裁判所にきちんと理解してもらうために全力を尽くすしかない。しかし、いくら判決で高額な賠償金が認められても、被害者やその家族はそんなことで納得出来ようはずがない。交通事故の事件で多いのは交差点で信号待ちでの停車中の追突である。頸椎捻挫や腰椎捻挫のむち打ち症になることが多いが、当たり所が悪いと高次脳機能障害となり、後遺障害等級表の1級とか2級に該当するような重篤な後遺障害を生じる場合もある。

● 悪夢の13連敗

今年の巨人には期待を掛けていた。FAで山口、森福、陽岱鋼の3選手を取り、外国人選手のマギー、カミネロも補強した。優勝する可能性は高いし、



少なくとも優勝争いには絡むと思っていた。ところが、交流戦直前から連敗街道が始まり、球団記録の11連敗を更新するワースト記録の13連敗をしてしまった。今年の野球は6月初めで早くもジ・エンドである。まさに一寸先は闇である。



● 一寸先は闇

私の転倒事故、私の体験した離婚事件、交通事故の損害賠償事件、野球などさまざまな「一寸先は闇」の出来事を述べてきた。さてこれらからどのような教訓を得るかである。交通事故のもらい事故は自分では避けようがないが、他のことは注意次第で防げる余地がある。転倒事故について言えば、年を取って足元が覚束なくなっているのに、坂道でも手すりなどにつかまらず小走りで行く自分への過信を改めることである。離婚について言えば、離婚を避けるためには、いつも相手のことを思いやり、会話をし、相手から発する合図を受け止めるようにアンテナを張っていることである。野球については、我が愛するジャイアンツに猛省してもらい、3年くらい優勝しないでもいいから本当に強いチームに作り変えてもらう以外ない。

1強と言われて我が世の春を謳歌してきた安倍内閣も、森友学園や加計学園問題の疑惑や共謀罪法案の強行採決で大幅な支持率低下を引き起こしている。自業自得とはいえ、こちらは一寸先は闇が当たると嬉しい。